

トピックス

コムギ黄さび病にご用心

2023年産の小麦において、これまで発生が認められていた赤さび病と病徴が異なるコムギ黄さび病の発生が認められた。近年本県において本病は確認されていなかったが、伝染が非常に早く、まん延すると減収につながるため、適正な施肥管理、圃場観察による早期発見など、防除対策に努める必要がある。

内容

2023年5月上旬、県内の小麦圃場で、葉脈に沿ってすじ状に病斑が形成される黄さび病の発生が認められ(写真1)、その病斑はこれまで発生していた赤さび病(写真2)と異なっていた。本病の詳しい発生病態は不明な点が多く、突発的に多発生する傾向が強い(大分：2007年・24年ぶり、長野：2016年・22年ぶり)。発病適温が低く、春先早い時期に発生すると考えられるが、これまで発生がほとんど確認されていなかった本県では、昨年5月に発生が認められた。そこで栽培地域における本病の発生状況を把握するとともに、発生要因について考察した。



写真1 黄さび病の病斑
(葉脈(矢印)に沿って形成される)



写真2 赤さび病の病斑
(葉身全面に形成される)

1 発生状況 5月下旬の調査において、西播磨地域では本病の発生は確認されなかったが、東播磨及び丹波地域では確認された。発病ほ場率は8.8%で、東播磨地域の1圃場で発病茎率が66%と多発していた。

2 本病の生態 これまでの知見によれば、本病の伝染は孢子による空気伝染で非常に広範囲に伝搬する。さらに病徴発現からまん延、枯死までの進展が早く、大幅な減収につながる。本病の発病適温は10~15℃と赤さび病(17~25℃)より低く、さび病類の中で最も早く発生する。一方、黄さび病菌は高温に弱く、北海道以外での越夏は困難と考えられており、黄砂とともに中国大陸から飛来した孢子が発生源になると推定されている。暖冬で、平年より降水量が多い条件、また、多肥(多窒素)条件では、罹病しやすく、多発の危険性が高くなる。

3 2023年産の発生要因 黄砂の飛来は、2023年は4月12、13日に大阪(本県に近い黄砂観測地)で観測されている。潜伏期間にあたる飛来後15日間の発生地域周辺のアメダスポイント(福崎、姫路、柏原)における平均気温は、4月19日~21日の3日間を除くと10~15℃で推移しており、この期間に発病、孢子形成が行われた個体から、孢子飛散が起って、一部圃場において5月に急速に感染が広がったと考えられる。

今後の対策

防除対策として、適正な施肥管理を行う。暖冬、多雨の天候時には、圃場観察を行い、黄砂の情報にも注意を払いながら、病斑の早期発見に努め、発見したら速やかに薬剤散布を実施する。防除薬剤の選定については「さび病」に適用のある薬剤を用いる。

松本 純一(病害虫部)